



発行所  
公益社団法人 国民文化研究会  
(九州←→東京←→全国)  
東京都渋谷区東1-13-1-402  
振替 00170-1-60507  
電話 03-5468-6230  
FAX 03-5468-1470  
http://www.kokubunken.or.jp/  
E-mail: info@kokubunken.or.jp  
月刊「国民同胞」編集部  
毎月一回10日発行  
購読料 年間2000円

# 未知の災禍に立ち向ふ「茅の輪」の智慧

―「常識を働かせ経験主義に徹する」道―

名和長泰

先般の「令和二年七月豪雨」では球磨川（熊本県南部に発して八代海に到る）流域に線状降水帯がかかって十日間で一〇〇〇ミリを超える降水があった。熊本県を中心に九州や中部地方などの全国各地でも連日のやうに大雨や突風などによる被害が発生した。例年に比べて日本周辺で広く海水温が上昇してゐたことから大量の水蒸気が流れ込んで異常な大雨につながったといふ。このところ「数十年に一度の大雨」が毎年続いてゐる。地球環境の変化が想像以上に深刻化してゐて、従来の方法では対処できなくなつてゐるのではないか。新しい気象モデルを用ゐての研究も進められてゐるが、豪雨災害を防止あるいは抑止する対応策を早急に実現して欲しいものだ。

生じた正体不明のウイルスによつて人々の健康と生命が危険にさらされて、耳慣れない「新しい生活様式」へと社会の変容が余儀なくされてゐる。今生きてゐる者にとつては初めて体験する世界的な異常事態である。その結果、やむを得ない面があったが、学校は四月五月と異例の「休校」になり、その後も感染防止のために「分散登校」「遠隔授業」など臨機の対応が試みられた。加へて医療用の衛生資材の供給が逼迫してゐることに驚かされたり、教育や行政サービスのデジタル化の「立ち遅れ」にも気づかされた。今世界各国がワクチン開発にしのぎを削つてゐるが一日も早い成功を期待してゐるところで、佐賀県みやき町の千栗八幡宮では旧暦にちなんで八月一日に恒例の「夏越祭」が催された。新型コロナウイルス感染の再拡大が懸念される中で、地域住民ら多くの

参拝者が本殿前の鳥居に設置された茅の輪をくぐつて、無病息災と夏場の健康とを祈願した。茅の輪くぐりは全国に伝はるが「水無月の夏越しの祓する人はちとせの命のぶといふなり」「蘇民将来 蘇民将来」などの唱へ詞がある。これは鎌倉中期の『積日本紀』に引用された『備後国風土記』（逸文）にある「茅の輪を付けてゐれば疫病を避けることができる」といふ須佐之男命伝説に由来するとされる。

地球環境問題の先駆けとして、一九六〇年代にイギリスの科学者ラブロックは地球環境を一つの生命体のやうにとらへる「ガイア仮説」を提唱した。彼は著書の中で、地球環境問題を人の健康にたとへて古代ローマ人を例に、次のやうに述べてゐる。「私たちは今、再三降りかかる災難に立ち向かつた祖先の例に倣うべきではないだろうか。つまり、常識を働かせ経験主義に徹するのだ。結果を得るのに科学的な正しさは必要ない。ローマ人は湿地に住むことの不健康さを知つてゐた。彼らは病気のもとを湿地から来る瘴気だと考え、沼地の排水を行い、その結果、マリアの問題は解消した。彼らが排水のかわりに、昆虫学や微生物学に金をかけていたら、いづれマリア原虫を発見し、蚊によつて媒介される

という事実には到達したかもしれない。そして、最終的には沼地の排水が必要という同じ答えに至り、問題は解決されただろう。しかし、そこに至る以前にはるかに多くの人命が失われ、健康が損なわれたことだろう。このローマ人の教訓は人類の歴史上、何度も繰り返されてゐる。」ジェームス・ラブロック『ガイア/地球は生きてゐる』（松井孝典監修・竹田悦子翻訳）より。

ローマ人に比べれば現代人は気象を観測して予測し病原ウイルスの遺伝子までつかんでゐる。とはいへ異常気象災害の抑止や新型コロナウイルスの感染防止は未だ実現できてゐない。古来天災や疫病の禍ひは幾度となく繰り返され多くの犠牲が払はれてきた。真の解決策がないとき先人たちはどう過してきたのだからか。わが国の『風土記』に伝はる物語は、避けがたい災禍があることに用心させて、毎年茅の輪をくぐつてそれを記憶させ身を慎んで備へてきたことを示すものではないだろうか。もちろんそれは川の氾濫を防ぐ堤防でもなければウイルスを克服するワクチンでもない。けれども未知の災禍に立ち向ふ智慧として「常識を働かせ経験主義に徹する」道を時空を超えて伝へてゐるのではないだろうか。（前久留米大学附設高等学校教頭